

神聖喜劇

第一卷

大西巨人

光文社

神聖喜劇 第一卷

一九七八年七月五日 初版第一刷発行
一九七八年七月十五日 第二刷発行

著 者 大 西 巨 人

装幀者 栃折 久美子

発行者 小保方 宇三郎

発行所 株式会社 光文社

東京都文京区音羽二一二―三／郵便番号 112
電話 東京(〇三)九四二―二三四一(代)
振替 東京六一―一五三四七

印刷所 株式会社 堀内印刷所

製本所 有限会社 榎本製本所

定価 一、四〇〇円

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。 © Kyojin Onishi 1978

0093-95001-2271(0) Printed in Japan

第一卷
目次

第一部 絶海の章

序曲 到着

第一 大前田文七

第二 風

第三 夜

7

11

25

55

第二部 混沌こんとんの章

第一 冬

第二 責任阻却の論理

第三 現身の虐殺者

第四 「隼人の名に負ふ夜声」

.....it is a tale
Told by an idiot, full of sound and fury,
Signifying nothing.

SHAKESPEARE: *Macbeth*

第一部 絶海の章

序曲 到着

対馬は、日本海の西の果て、朝鮮海峡に位置し、上島、下島の二つの大島と九十あまりの小島とから成る山がちな列島である。西北は朝鮮に対し、東南は対馬海峡をへだてて奄岐ノ島に対する。上島と下島とは、近接し、北北東から南南西にむかって長く、南北七十二キロ、東西十八キロ、総面積七百三平方キロ、その大きさは、わが国の主要な島島のうち、沖縄本島、佐渡ガ島および奄美大島に次ぐ。島の中央やや東寄りを山脈が縦に走り、五百メートル前後の山山が幾重にもかさなつて東海岸へ急劇に傾斜している。

かつて、この島は、日本第一の要塞と言われた。

対馬要塞は、一九四一年（昭和十六年）夏からのち、戦備体制に入り、北、中、南の三地区・三個大隊の重砲兵

力が、全島十一箇所の砲台に配置せられ、別に独立の歩兵部隊二個中隊は、中地区に駐屯した。北地区第一中隊豊砲台に四十糧加農砲二門、南地区第七中隊竜ノ崎砲台に三十糧加農砲四門、他の七砲台には四五式十五糧加農砲それぞれ二ないし四門。残る二箇所の臨時砲台は、三八式野砲四ないし二門を備えた。

世界に仁義の法を布き

統ぶる使命の神州や

絃絃相摩す玄海の

怒濤をおさへて聳え立つ

朝鮮海峡制扼の

務めは重し、わが対馬

玉なす汗をぬぐひつつ

山路けはしき幾十里

北風凍る玄海の

波濤を蹴つて幾海里

北と南の岩には

山なす巨砲われを待つ

この稚拙な歌詞は、対馬要塞重砲兵聯隊『聯隊歌』の二節である。要塞司令部と聯隊（あるいは戦時通称西部第七七部隊）本部とは、上島東沿岸の鷗知町にあった。

一九四二年一月十日午後十時十五分、われわれ福岡、佐賀、長崎三県出身の補充兵役入隊兵たち（および同三県出身の現役入隊兵たち）その他を乗せた博多・釜山間定期船珠丸は、対馬厳原に入港した。指定せられた航海日は昨一月九日であったが、その日は時化のために定期船が欠航し、われわれは一日遅れて乗船したのであった。博多港解纜は午後一時三十分、曇り空の下之余波の玄界灘に暗緑色の大波が果てしなく起伏し、八百トンの小貨客船は、絶えず前後左右に動揺し、行き悩んだ。

入隊兵たちの多くは、まず三等船室のそこかしこに数人ずつ固まり、しきりに雑談したり飲食したり合唱したりしていたが、やがて大部分が船酔いに倒れた。嘔吐する者も、おいおい出て来た。その時分には、もう舌岐ノ島が近かった。

私は、小用達しのついでに、二、三回、数分間ずつ甲板に出てみた以外には、片隅にひたすら寝転んで、沈黙していた。当時における私の思想の一断面に従えば、私の生は、過去の至極不生産的であった二十二年数カ月を

もって観念的にはすでに終わりを告げ、いまや具体の破滅を目指して旅立っていたのである。この海を逆に越えてふたたび本土を踏むことは、もはや私にないであろう。その最後の旅路の最初の道筋に、嘔吐その他のどんな醜態をも演じるようなことがあってはならない。私の気持ちは一種克己的であった。私は何一つ飲食物を持って来ていなかった。食らい酔って歌う彼らに、私は、心で同感しなかったが、彼らのある部分が嘔吐し、もしくは他人に苦痛を訴えるに及んで、彼らを嫌悪した。私自身は、船旅に経験もとぼしく弱くもあるのを自覚し、乗船早から緊張と警戒とを怠らなかったのである。話し相手を求める気は、まるでなかった。知人もない。

以前から私にあったこの種の克己主義は、太平洋戦争を通じて私の内部に強化せられた。私の弱点でもあり長所でもある作用を、それは、今日に至っても止めないらしい。戦後のある時期、一は否定的に、他は肯定的に、私を嚴格主義者と呼んだ人人がいるのも、このことと無関係ではないのであろう。

二度目に甲板に出た際、私は、右舷の中ほどの欄に凭って、最も長くそこに留まった。黒い外套を着て戦闘帽をかぶった若者が、私以外にただ一人の甲板上の客であ

った。私よりも船尾に近く欄に靠れた彼は、脇目も振らず海上遙かな水か雲かに視線を放ちつつけているようであった。刺すような北風が、しばしば波の繁吹きを孕んで、私の面を打った。日の光の絶えて差さぬ海原に、目路の限り、私は、島影を見ない。切れ間なく脹れ上がる灰色の巨大なうねりをしばし見つめると、私の眼は、あやしい眩めきを覚えた。船首に切り裂かれて舷側を過ぎる潮の流れは早く、私は、人為のゆらぎかたむきつつ自然にあらがって行くなげな速度を感じた。

「八十島過ぎて別れか行かむ」と不意に私は口に出していた。気づいて、私は、それを心外とした。あたかも私の行く先は、大むかしの防人とおなじく、対馬である。悔恨ともあこがれともつかぬ一つのするどい疼きを伴った感情が、私を捕え、既往流転の時間にかかわるあるおもかげ、ある肉声、ある観念、ある形象が、その底によみがえろうとした。しかし私は、無帽の丸刈り頭を一振り二振り左右に振って、その方向への考えの発展を私自身に拒絶した。それらは、すべて普通人の感傷でしかない。骨肉と他人と、異性と同性と、具体と抽象とを問わず、いまこの海の上の私が名残を惜しまねばならぬ人も物も、ないはずである。

「そら晴れて 日あきらか／鏡のごとき うな原を／ゆたかに舟は すべりゆく」と今度私は、意識してくちずきみ、気分を換えようと試みた。まわりの風情に全然それはそぐわなかった。四十年前ほぼ相接した海路を行った第二軍軍医部長森林太郎と今日の私とは、天候から戦争観に至るまで、あれもこれもあまりに違っていたのである。私は、「かぜなきて ひるしづか」とまた声に出し、殊更に苦笑してみたが、たちまち「ほととぎす 忍音ながら／」声に 全き心を／われは籠めてき」に思い至った。私の表情は、にわかに翳った。このとき小雨が落ち始めた。

欄を離れようとして、私は、よろめき、小さい叫びを上げた。若者は、初めて私のほうにちらりと正面の顔を見せた。彼の双眼の青い輝きを、その瞬間の私が、印象的に認めた。

船室に下りて私は横になった。生理的にも精神的にも不快感が募りそうであったから、私は、眼を閉じて眠ろうと努力した。なかなかそれは、山口誓子の「玄海の冬浪を大と見て寝ねき」というような眠りではあり得なかった。波濤の上の大ぶらんこは、私の心身を弄び、半ば醒め半ば眠った脳髄に、奇怪な観念や曖昧な映像やが、

隠れては見え、現われては消えた。

途中で一度、目立って船体の動揺が静まり、船脚がにぶった。いくらかの人人の船室を去る動きが起こった。

私も、甲板に立ち、暗夜の左舷に島影と燈火とが迫ったのを見た。そこが壱岐の勝本港である、と近くで誰かが誰かに語った。汽船は、ここで短時間碇泊してのち、ふたたび針路を北西に取った。やがて私は、また眠り、また醒め、また眠り、そして醒めた。

上陸地が近づき、われわれは、思い思いに下船の支度をととのえ、甲板に上がった。この風光明媚を称えられる島も、その夜の私の眼には、ただどす黒い殺風景な何かの大きな固まりでしかなかった。

われわれ補充兵役入隊兵百数人（および約同数の現役入隊兵）は、上陸後ただちに、出迎えの将校たちに引率せられ、鶏知にむかつて夜行軍を起こした。厳寒の道のりは、坂路を多く交じえて、約十二キロ。途中、小休止一回。朝めしを一膳食ったきりの私は、激しい空腹感に襲われつづけた。

われわれが屯営に到着したのは、夜半過ぎ、正確には翌一月十一日午前一時十分であった。

第一

大前田文七おおまえだぶんしち

一

一期（三カ月）の教育期間中、われわれの内務班長は、陸軍軍曹大前田文七であつた。彼は、そのころ三十一、二歳にもなつてゐたろうか、身長約一メートル七十センチ・体重七十数キロの立派な体格を持つていて、それは、「重砲兵」といういかめしい言葉がわれわれ未教育補充兵に加えた一種の圧力感に、いかにもふさわしかった。彼は、野戦重砲兵として、杭州湾敵前上陸を手始めに、徐州および武漢三鎮の攻略にも参加せる「歴戦の勇士」と言われていて、また彼自身も、よくそのように自慢していた。

大前田軍曹が何かのおりふし自発的に物語つた（と私が主に人づてに聞き知つた）戦場での体験談には、たとえば次ぎの三つがあつた。

その一つは、人間を生きながら丸焼きにするには、二分間が必要である、あるいはわずか二分間しか必要でない、という話であつた。もっとも、それをうまくやり遂げるためには、前もつてその「チャンコロ」に石油を十分に浴びせておかねばならない、と彼は忘れずに言い添えていた。

その二つは、大前田軍曹らが、抗日容疑の中華国民人間（？）をいちどきに数人捕えた機会に、拷問の一方法として、大ぜいの日本軍人が見ている前で、その捕虜たちの男女一組に丸裸かとならせ、性交の実演を強要した、という話であつた。事態は、拷問の一方法からさらに変転し、ついに大前田らは、もしも彼らの要求が実現せられたならば、その中華国民男女一組は助命せられ釈放せられるであらう、と約束するに至つた。大前田の言いぐさによれば、抗日中華国民人たちは、それまで相当の責め苦にも耐え、沈黙を守り、あわれみを乞ふとしなかつたにもかかわらず、その性交実演要求には「音を上げた」そうである。ただし、この「音を上げた」は、中華国民人男女の屈伏を意味するのではなく、彼らがそれまでの手強い沈黙を破り、むしろ一思いに殺せと求めて、性交の実演を固く拒んだ事実を指すのであ

った。「なんぼ支那人でも、やっぱりちつとは恥ずかしさを知つとるんかな。どうしてもそれはやらんじやった。」と大前田軍曹は、彼自身はまるで恥を知る人間ででもあるかのように、ここで半ば嘲笑的に感嘆してみせた。

こういいういざこざの次ぎの段階には、大前田が、その中華民國男子を一脚の卓に接して立たせ、彼の陰囊を卓上に摘み載せて、二つの金玉を小鉄鎚の相次ぐ二打撃でたたき潰すと、相手は、一声唸つて卒倒し、それきり死んでしまったそうである。この最後の部分を語るとき、大前田は、彼自身の陰囊を突如として軍袴（ズボン）の上から両手で驚つかみにすると同時に、異様な呻き声を發して上体を仰け反らせさまに強張らせ、その齒を食いしばり双眼をかつと見開いた顔を数秒間急激にわななかせて、恐ろしく派手な卒倒の場面を演じたのであった。

その三つは、華中のどこかで、大前田（当時兵長）以下上等兵一、一等兵一の三人組が、物資徵發の目的で一民家に押し入った際に犯した陵辱ならびに殺人の話しであった。戦地下番（戦地婦り）の下士官兵が軍隊仲間などを相手にしてまたま心置きなく繰り広げた戦場回顧談においては、「徵發ボボ」すなわち強姦は、別にめずらしいことではなく、いっそかなり有り触れた現象でさ

えあった。しかし大前田兵長らが実行したというそれには、いくらか独自なおもむきもあったようである。彼らが侵入した民家には、中年の夫婦とその十六、七歳の娘とが住んでいた。大前田らは、まず有り合わせの綱で良人の上体をうしろ手にしばり、その背中を壁に持たせて、両足を投げ出させた。早くも彼らの狙いを知った妻女は、三人が彼らの欲望を彼女によって遂げ、娘について行なわないことを、哀願した。彼らは、その願いをいちおう聞き入れ、大前田を先頭に上等兵、一等兵の階級順で妻女を輪姦したが、ひきつづきおなじ順番で娘をも輪姦した。「母親のほうは四十くらいじやったが、ちよつとした別嬪で、娘よりもよっぽど味がよかったぞ。しかし、あれじゃな、支那人ちゆうても、母親ともなりや、自分をやってくれと頼んで、わが娘を庇うたからなあ。かわいそうなもんじやよ。」というのが、その「母親」にたいする大前田のたいそう好意的な批評であった。

彼らは、代わる代わるに、二人の中華民國婦人の陵辱を彼女らの良人であり父である一人の中華民國男子の目の前でやって退けただけでなく、始めから仕舞いまでその情景を見届けることをその男子に強制しつづけた。このいくぶん特徴的なやり口がほかならぬ彼自身の思いつ

きであつたことを、大前田軍曹は誇つていた。事後に彼らは、親子三人を銃剣で刺し殺した。「後腐れがないようにな。」と大前田は、その理由をも明らかにしていた。

しかし入隊八日目、一月十八日、日夕点呼（通常消燈就寝時限前三十分ないし一時間に行なわれる定例夜間点呼）の用意が済んだころ、われわれの内務班（部隊本部控置部隊新砲廠第三内務班）に大前田軍曹が初めてその姿を見せたとき、彼がそういう体験の持ち主であるという事実を、私は、むろんまだいっこうに知る由もなかった。いったい私一個を直接の相手として彼がこの種の物語りをするというようなことは、私の在隊期間を通じて一度も起こらなかった。なにしろなお後日ようやく私は、彼本人が他の下士官兵にむかつてそれらを語る二、三の場面に会つたり、隊内の相当広く流布せるうわさとしてそれらを自然に承知するようになったり、したのであつた。

その日曜日の夜、点呼用意（兵が日夕点呼前約三十分に行なう舎内の清掃整頓）を済ましたわれわれが、薄暗い十六燭光の下、寝台の列の前に整列したところに、班附の神山上等兵が、私の見知らぬ一人の頑丈な下士官と連れ立って入つて来た。

「氣をつけ。本日の命令を達する。——休め。」神山上

等兵は、その声音に氣取つた張りを持たせて「命令下達簿」を読み始めた、『対馬要塞重砲兵聯隊日日命令／＼、陸軍軍曹西村菊三郎／昭和十七年一月入隊教育召集補充兵教育助教ヲ免ズ。／一ツ、陸軍軍曹大前田文七／昭和十七年一月入隊教育召集補充兵教育助教ヲ命ズ。』

——『控置部隊日日命令／＼一ツ、陸軍軍曹西村菊三郎／新砲廠第三内務班長ヲ免ズ。／一ツ、陸軍軍曹大前田文七／新砲廠第三内務班長ヲ命ズ。』——命令終わり。

われわれは、この「命令終わり」で、仕来たりのとおり「不動ノ姿勢」を取つた（休日には「日日命令」が発せられることは通例上ないのであるが、新兵班に内務班長が当初から不在という異常事態の早急な解決のため、大前田の第三班長就任命令が、例外的にその日曜日に出たのであろう、——そういうことを、私は、後日に知つた）。普段の多くと違つて、今夜の神山上等兵は、そのわれわれに「休め」を号令しなかった。彼は、このとき黒縁ロイド眼鏡の奥の両目に鋼鉄のような光を湛えて、全員をひとたり眺めた（その種の鋭利な冷酷な眼の色は、下級者にたいするあれこれの緊迫状況において、現役古参兵にしばしば現われ、彼らの外貌にその実際の年齢よりもよほど老けた陰影を齎したのである）。やがて

おもむろに彼は、口を開いた。

「注目。——かねてわが第三内務班長を命ぜられておられた西村軍曹殿は、今月上旬、不幸、急に発病入院なされて当分退院の見こみがないため、いま達したとおり、本日の命令で大前田軍曹殿が、この班の班長となられ、お前たちの教育に当たられることになった。このお方が、陸軍軍曹大前田文七殿であられる。大前田班長殿は、前回の召集においては、杭州湾の壮烈な敵前上陸作戦を始め、前後四年に亘って大陸各地の激戦に参加し、幾多の赫赫たる武勲を立てられた軍人であられるから、このような班長殿の下で教育期間を過ごすことができるのは、みんなにとって実に幸福である。いいか。」

われわれは、この「いいか」にたいして、一斉に「はい。」と叫んだ。軍隊ではこのような場合に下級者の沈黙無言が許されないということをも、皆は、すでに学び知っていたのである。神山上等兵は、彼自身が行なった演説の効果に満足した様子で、重重しくうなずいた。

「ようし。——休め。」

しかしまた神山は、ほとんど息も継がずに声を張り上げて、「気をつけ。番号。」と呼んだ。内務班員が、一度「元へ」を食らっただけで、二度目にはとどこおりなく

番号を唱え尽くすと、神山は、それを見澄ましてから、大前田軍曹に正しく向かい合い、室内の敬礼（室内における無帽の軍人が上体を約十五度前方にかたむける方式で行なう敬礼）を行ない、「第三内務班、総員四十五名、欠員一名、欠員は衛兵、現在員四十四名、集合終わり。」と報告し、そこで声を少落して、「総員には班長殿も入っておられます。欠員は、班附の村崎一等兵が風紀衛兵勤務であります。」と付け加えた。

大前田軍曹は、彼の紹介を神山上等兵がしゃべっている間、艶のいい丸顔の中の少しきよんとしたような太い出目をなんだか照れ臭そうに空中に放ち、彼自身の充実した体軀を持て余したというていたらくで、やや左かしぎにしゃちこばっていて、それはひとまずその屈強な見かけにも似合わぬ一個の好人物を誰にでも想像させさえしそうな第一印象であった。

「う、御苦労。——休め。休んたまま、注目。」と大前田は、言い出したが、あとの言葉が出て来なかったとみえ、そのままだまって、なんとなく兵たちの顔を見渡していた。

神山上等兵が「命令下達簿」を朗読したときにも、私は、新班長のめずらしい名前から若干のおかしさを意識